

2023年6月22日18時から駿河台キャンパスリバティータワー1113教室にて、ニューヨーク大学（アメリカ）准教授・のタチアナ・リンホエワ（Tatiana Linkhoeva）氏による講演会“*How did medieval Samura Yoshitsune become Chinggis Khan?*”（中世の武将源義経はいかにしてチンギスハンとなったのか？）が実施された。なお、講演は英語で行われ、講演・質疑応答は日本語の通訳と共に行われた。

タチアナ・リンホエワ氏はアメリカ・ニューヨーク大学で教鞭を取る新進気鋭の近代日本・アジア史研究者である。リンホエワ氏は、2020年に *Revolution Goes to East: Imperial Japan and Soviet Communism* (Cornell University Press) と題した著作を出版され、日本の近代史をこれまで見過ごされてきたロシアおよびモンゴルとの関わりという独自の視点から論じたことから高く評価された。当該著書や近年リンホエワ氏が取り組まれている研究をお話しいただくことで、参加者にアメリカでの日本史研究の最新の動向や日本・東アジア関係という喫緊の課題に対する独自の視点をご提供いただけることが期待されるため、今回のご講演を依頼した。

講演会は学内外から60人近くの参加者を得て、講演に続く質疑応答ではリンホエワ氏、コメンテーター丸川哲史氏（明治大学政経学部教授）、参加者との間で積極的な議論が行われ、予定時間を1時間あまり超過して終了した。

ご講演においてリンホエワ氏は、日本で1159年から89年に生きた武将である源義経をめぐる神話の歴史的な展開を近世・近代の日本の知識人の言説を通して読み解き、日本とモンゴルや満州との歴史的・政治的関わりの中で義経神話の内容が変貌を遂げてきたことをお話しくくださった。以下にご講演内容の概要を紹介する。

まず、リンホエワ氏は、義経神話を〈源頼朝は義経の名声に嫉妬し、彼を自らのライバルと捉え、彼を殺害しようと彼の刺客を派遣した。ところが、義経の刺客から逃れて北海道へと辿り着き、アイヌの人々と住み始め、そこでアイヌの首長の娘と結婚し、のちにアイヌ民族の総領となった〉という物語であると定義した上で、何世紀もの時を経て、この物語はたくさんのバリエーションを伴って語られてきたと指摘された。

次に、リンホエワ氏は、義経神話は中世において成立したと論じた。具体的には、1266年に書かれた鎌倉幕府の正式な歴史書である『吾妻鏡』や『平家物語』、15世紀に記された義経についての物語である『義経記』の中に記された物語群が義経神話の起源となること、その後、主に東北地域に住んでいた無名の書き手や仏教の僧たちによって、義経の伝説は口承伝説を集めた「御伽草子」としてまとめられたことを紹介された。中世の義経伝説成立期において、最も有名な物語は「御曹司島渡り」と題されたもので、その内容は『義経記』が翻案されて、義経が武術に関する仏教の経典を探し求めて、蝦夷等の北国の、実際に存在しているものだけでなく、虚構のものも含まれるさまざまな島を訪れるというものであったという。

続いて、リンホエワ氏は、義経伝説は1604年の徳川幕府の成立後、近世に入って劇的な変化を遂げたことを指摘された。徳川幕府は、本州北の松前家に対して近隣のアイヌ民族との政治的・商業的な関係を取り持つ特別な権利を付与した。ここで重要なのは、1670年以降に御曹司島渡りの物語に飛びつき、義経の蝦夷への逃避という偽の物語を有名にしたのは、松前藩の歴史家たちであった点であるという。なぜなら、アイヌに対する政治的経済的な覇権を確立するために義経神話を利用する必要があったからである。実際に、松前藩の歴史家たちはアイヌの神である「オキクルミ」は実際には義経であったという説や義経がアイヌの首領の娘と結婚し、彼の子供たちがアイヌの首長となったという説を主張したのである。

そして、リンホエワ氏は、18世紀初期になると、義経の物語は再び新たな展開を迎え、徳川幕府が日本と満州地域との繋がりを強調するために義経神話を積極的に利用したと指摘された。具体的には、徳川幕府の相談役であった歴史家の新井白石は、1712年に記した『篤志遊論』と1720年に記した『蝦夷史』という書物において、義経が韃靼地域を旅して女真族の王の娘と結婚し、日本の武家政権と女真族の王政とを統一し、義経の子孫たちは他でもない清朝の王家となったと主張したのである。つまり、中世において義経神話は義経と近隣のアイヌ民族との親族関係を想像させるものであったのに対して、近世に記された義経神話の物語は、義経と大陸の武装政権との血縁関係を捏造するものとなったのである。

さらに、リンホエワ氏は、近代に入ると、大日本帝国の政治家や知識人たちが日本と大陸との歴史的関係を強調するために義経伝説を流用し始めたことを紹介した。例えば、日本人で初めて非公式のロシアの外交官となった瀬脇寿人(1822-1878)

は、『ウラジオストーク日記』という自著において義経が当時のロシア極東の領域に滞在し、彼の支配の下で諸民族を取りまとめたと述べることで、日本とロシア極東との歴史的繋がりを証拠立てて説明しようとし、現在でこそロシア帝国の支配下にあるものの、実際には彼の地とその人々は歴史的、文化的、民族的にはアジアに属すると主張した。また、1879年にロンドンの日本領事館に属していた末松謙澄(1855-1920)は、瀬脇の著書を踏まえる形でチンギスハーンの偉大な征服と日本のヒーロー義経とが同一人物であると題した記事を英語で発表した。末松は、義経神話を用いることで、義経が表象する日本には、己の国家の独立性や法律、文化、仏教、優れた軍事戦略を以て、現状では劣った状況にいるモンゴルを引き上げて発展させる勤めがあるという帝国主義的欲望を表出したのである。

最後に、リンホエワ氏は、帝国主義時代の日本において、義経伝説が知識人や官僚が積極的に利用しただけではなく、民間の市民においても熱烈に支持されたことを紹介された。例えば、末松の著作物が日本語に翻訳されると、歴史学者がその問題を指摘したのにもかかわらず、日本古来の歴史的ヒーロによる大陸での冒険を渴望した市民たちが熱心な読者となり、義経伝説をめぐる物語は商業的な大成功を収めた。また、シベリア出兵に通訳として勤務した小矢部善一郎は、『チンギスハーンは義経なり』と題した書物を著し、ユーラシア大陸での義経の冒険の軌跡を詳述した。小矢部は、義経神話を用いて、ブリヤート・モンゴル人と日本人との間の人種的、言語的、文化的、物質的な繋がりを示す証拠を提示し、大日本帝国において外国の脅威や支配からモンゴルを含むアジアを再び救う第二のチンギスハーンが生まれるべきであると主張し、東北アジア大陸への日本の侵略を正当化したのである。

ご講演の結論として、リンホエワ氏は、義経がチンギスハーンであるという物語は事実でも論理的でもないにもかかわらず、強力な政治的神話として日本の歴史的な記憶の中で長く執拗に続いてきたと指摘された。世界史の中で変化する日本の位置付けを人々が措定しようとする度に様々な方法で動員されてきた義経神話は、時の権力者だけでなく、民間の歴史家や冒険家、さらには一般の読者によっても積極的に支持されてきたのである。

ご講演に続いて、コメンテーターをお願いした東アジア思想史研究者である丸川哲史氏から、リンホエワ氏のご講演に関して、次の4つの観点、すなわち、義経神話が持っている「英雄」性の思想史的視座や、東北ユーラシア地域における空間認

識の曖昧さの由来の歴史的視座、モンゴル帝国を「世界史を動かした消えゆく媒介」として捉える歴史的視座、日本人における東北ユーラシア地域に対する現代日本社会における関心の低さを過去の関与にかかわる否認の構造として読み解く心理的視座からコメントをいただき、講演内容をさらなる豊かな議論へと拡張していただいた。

質疑応答の時間では、義経神話の現代社会への影響を問う質問や義経神話と類似する神話の有無に関する質問、義経神話の成立や流通に関与した存在に関する質問、現代モンゴルにおいて義経神話が知られているかどうかという質問など数多くの問いが寄せられ、講演時間を大幅に超過する形で熱心な議論が展開した。中でも印象的であったのが、講演時間が終わってからも、リンホエワ氏の元に学生たちが行列をなして熱心に質問をしていた姿であった。

本報告の最後に、講演者のリンホエワ氏、コメンテーターの丸川氏、講演会への参加者の皆さん、そして何よりも、リンホエワ氏の来日にあたって様々なご支援を賜り、講演会の実現へとお導きくださった明治大学国際連携事務室の皆様にご心よりお礼申し上げます。

